

研究の窓

指導現場を見据える眼と科学的な視点を大切に、研究と教育に力を尽くす。

山本先生は大学時代からスポーツ生理学を専攻し、スキーをはじめあらゆるスポーツの動きを実際のフィールドで測定、科学的に分析する研究を積み重ねてきました。そうした実績が全日本スキー連盟の目に留まり、大学院時代にはナショナルチームのコーチに大抜擢。研究の成果を世界レベルの指導現場へ還元していききました。そして現在、貴重な経験の数々を教育現場で活かし、授業やゼミ、キャリア教育、部活動での指導などに力を注いでいます。「自分で自分の可能性に線引きをせず、何事にも強い意志で挑んでほしい」と、学生たちと真剣に向き合う、その熱意の根底にある思いを語っていただきました。



高校生の頃、選手としてスキーに熱中していた山本先生は、指導者になることをめざして大学に進学。そして大学院時代、日本オリンピック委員会から委嘱を受け、全日本男子スラロームチームのコーチとして世界の舞台で活躍しました。ヨーロッパに遠征し、スロベニア人のコーチと刺激し合いながら選手たちの体力や技術力の向上に努めたそうです。



山本周史

健康医療科学部
スポーツ・健康医科学科 准教授

【学歴】

1995年3月
1997年3月
2001年3月
2001年4月～2002年3月

【職歴】

2000年4月～2002年4月
2003年4月～2004年3月
2004年4月～2008年3月
2008年4月～2010年3月
2010年4月～現在

中京大学体育学部体育学科卒業
中京大学大学院体育学研究科修士課程スポーツ生理学系修了
中京大学大学院体育学研究科博士課程スポーツ生理学系満期退学
中京大学大学院体育学研究科スポーツ生理学系研究生

財団法人全日本スキー連盟男子アルペンスラロームチームコーチ
中京大学体育学部非常勤講師
三重中京大学短期大学部こども学科(旧松阪大学短期大学部幼児教育学科)講師
三重中京大学短期大学部こども学科准教授
愛知淑徳大学健康医療科学部スポーツ健康医科学科准教授

競技スポーツは、文化の一つとして認知されています。スポーツ選手は、身体能力を極限まで高め発揮します。人々は、彼らの一挙一動に感動を覚え、試合観戦に熱中します。私は、この競技スポーツを支えるスポーツ科学の中の、体力や技術に関わる研究分野である、スポーツ生理学を専門としています。そして、対象種目はアルペンスキー競技で、私自身が選手として取り組んでいました。研究の道へ進んだきっかけは、選手時代に抱いた疑問を解決したい思いでした。研究では、選手の体力、滑走中のエネルギー消費や下肢筋電図により、ジュニアからトップ選手の競技力差の要因を分析してきました。しかしながら、極限状態で滑走している選手の運動の違いを明確に説明するには至っていません。指導者の道を、研究者の道と並行して歩んできました。研究成果は指導現場へ還元されなければならぬと考え、自身で実践してきました。母校の大学スキー部コーチを手始めに、2002年ソルト

レイクシティーオリンピックまでの3シーズンは全日本男子スラロームチームのコーチを務めました。年間300日の海外遠征では、雪上練習と体力トレーニング、ワールドカップ等のレースで選手に指導に携わりました。世界レベルに直接触れた貴重な経験でしたが、指導者としても研究者としても、多くの認識を改めざるを得ない経験でもありました。ヘッドコーチの「世界を見ていないコーチは、世界で活躍する選手を育てられない。」の言葉には、本物のアルペンスキー競技を全く知らない指導者・研究者であった自身に驚きを隠せませんでした。スポーツに携わる教育者は、文武両道であるべきと考えています。授業では、スポーツトレーニング論と同演習のように、講義と実技を担当しています。研究と指導の経験に基づき授業を展開していますが、スポーツタイプの学生も納得はできるようです。今後も、学生が高い志を持てるような教育をしたいと考えています。